

Title	大豆粕流通と清代の商業的農業
Author(s)	足立, 啓二
Citation	東洋史研究 (1978), 37(3): 361-389
Issue Date	1978-12-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/153711
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

大豆粕流通と清代の商業的農業

足立啓二

はじめに

- 一 上農の形成と金肥・購入飼料
- 二 清代中期に至る大豆粕の流通

(i) 大豆粕の利用

(ii) 流通の發展

(iii) 大豆粕流通と江南農業

- 三 清代後期における流通の變化

(i) 流通の變動と衰退

(ii) 變動の背景

小結

はじめに

私はさきに、小論「明末清初の一農業經營」において、明清時代の農業經營は富農的に發展する可能性を持たなかったという従來の通説の論據とされてきた『沈氏農書』を分析し、それがむしろ、それ自體として富農經營を反映した農書であることを明らかにした。⁽¹⁾『沈氏農書』が單なる個別經營の收支表ではなく、それなりの普遍性を前提として書かれた農書であること、また、商業的農業は孤立した一個の經營だけでは成立しないことからして、前稿は「沈氏農書型經營」が

ある程度の廣がりを持っていたことを示唆するものであった。しかし、商業的農業の廣がり、その推進力である富農的經營の普及、清代における發展の趨勢といった問題については、そこでは全くふれなかった。本稿は、清代の長江下流デルタ地帯において中心的な金肥・購入飼料となつた大豆粕について、その流通の發展と變化を分析することを以て、こうした問題の一端を明らかにしようとするものである。

一 上農の形成と金肥・購入飼料

大豆粕の流通を跡づける前に、その流通をひき起こした經營體、とりわけ『沈氏農書』に見出した商業的農業の推進力としての富裕な經營體の性格を簡單にながめておきたい。

清代の農業經營をみる上で注目すべきことは、經營的な視點から農民を分類する「上農」・「富農」・「上戸」等の概念が成立することである。分類基準の第一は、經營面積にある。章謙存は、救荒政策を述べた『文牘』のなかで佃戸を分類し、二〇畝ばかりを經營するものを「上戸」あるいは「上農」、一二〜三畝のものを「中戸」、四〜五畝を經營するものを「下戸」としている。これらはいずれも無所有の佃戸であり、彼等が「上戸」・「上農」と呼ばれるのは、所有の大きさではなく、經營面積の大きさに基づいている。經營的な分類の第二の視角は、他人の勞働力の雇傭にある。長工や短工の使用は「上農」・「富農」の特色である。⁽⁴⁾ 經營を分類する第三の視角は、勞働過程の技術的特色、とりわけ、勞働生産性の高い肥料を使用するかどうかに懸っている。光緒『松江府續志』は、上農の施肥法として、綠肥・推肥・大豆粕の使用を記している。⁽⁵⁾ 『農事幼聞』は大豆粕を「富家」の肥料として傳えている。他方、こうした「上農」・「富農」の對極には、棉田を三〜五畝耕作する「下農」⁽⁶⁾、『文牘』でみた佃作面積四〜五畝の「下戸」、大豆粕肥料を掛買せねばならない「貧農」⁽⁷⁾が形成される。

ここにあげた「上農」から「下農」に至る區分は、『文牘』の例からもわかるように、所有面での豊かさを基準として

いない。分類は、經營面積・雇傭勞働の使用・金肥の使用等、經營様式の諸側面に從つてなされている。「上農」を「上農」たらしめる豊かさは、直接的な生産過程から分離し、租米收入によつて蓄財を計る地主的豊かさとは異質である。

「上農」は、ここでは近代的な經營概念である。それはまた、傳統的な「上農夫」の概念とも異なる。「上農夫」は、『禮記』・『孟子』以來、勤勉な個々の農民を指す言葉であり、經營的な視角から用いられる場合にも、一個の勞働力を指す概念であつた。⁽⁶⁾

注目すべきは、以上の「上農」・「富農」概念は、他人の勞働力を雇傭し、他の小經營に比して廣い面積を經營し、勞働生産性を高める金肥や購入飼料を用いるなど、多くの生産的投資を行いつつ商業的農業を營む經營體を指しており、先に『沈氏農書』の分析でみた沈氏農書型の富農經營像を、様々な面から描き出すものになっていることである。沈氏農書型の富農經營が一般に認められていたことを、側面的に示すものである。

さて、このような「上農」・「富農」經營が發展するためには、明末清初以來、解決すべき問題があつた。中國における富農的發展は、徹底した深耕多肥の追求の中から生れてきたものであり、それ故に、勞働生産性向上のためには、肥培勞働の省力化が鍵であつた。とりわけ、商業的農業の發展は、勞賃とともに、人糞など從來の肥料の價格を上昇させた。新しい施肥の體系と新しい勞働力購入の體系を作り出すことがさし迫つた課題となつていたことは、前稿でみたとおりである。⁽⁶⁾ こうした状況の下で、從來の人糞購入に代つて、肥料への出費の面でも、肥料運送の勞働力の面でも、いずれも合理的な大豆粕が登場した。

近年勞賃が高いばかりでなく、なまけることもまた多く、施肥がうまくいかないからには、油粕を使う方法が、勞働も肥料もあわせ省けてよい。⁽⁶⁾

清代になると、續いてみるように、大豆粕は商人によつて遠方から大量に一括輸送され、村鎮の朝市で販賣されるようになる。⁽⁶⁾ 數十キロも遠方から肥料を買いつけていた從來の商業的農業の經營者にとつて、勞働生産性を高める上で大豆粕

は魅力的な肥料であった。一般的に金肥は、自家の糞壤能力を超える土地を耕作する農家に特有なものであったが、なかでも『農事幼聞』等に見られるように、大豆粕は「上農」・「富農」層を特徴づけるものであった。富裕な階層が大豆粕流通発展の牽引力となった理由はここにあった。以下、大豆粕流通の発展を通じて、清代における農業経営の動向を分析する。

二 清代中期に至る大豆粕の流通

(i) 大豆粕の利用

大豆粕肥料が農書に見え始めるのは、明代中期以降のことである。⁽⁹³⁾一六世紀初頭に著わされた『便民圖纂』では、水稻⁽⁹⁴⁾の基肥として河泥とともに大豆粕が用いられており、天啓『海鹽縣圖經』には、豚の糞や草とともに大豆粕を混ぜて腐爛させた河泥を、田植の前に施す習慣が記されている。棉作への大豆粕利用としては『農政全書』の記述が有名であり、密植の場合、畝ごとに十餅を用いるとされている。

しかし、大豆粕の使用法が幾つかの農書に現われるにもかかわらず、當時の総合的農工技術書である『天工開物』には、大豆粕を肥料とすることが記されていない。同書は搾油原料として大豆をあげるにもかかわらず、乃粒の巻に胡麻から棉花に至るまで八種類にわたって記された油粕肥料の中に大豆はない。⁽⁹⁵⁾南方で行なわれている大豆を肥料として利用する方法とは、同書によれば値段の安い時にそのまま水田に撒くやり方であった。⁽⁹⁶⁾この技術は他の農書にも見られる。また『補農書』は、麥作の肥料として、紹興地方では菜種粕を使用するのに對し、自分の住む嘉興府桐鄉では、一層肥力の強い大豆粕を用いているとしている。⁽⁹⁷⁾これらの事實から、大豆粕は明代中期には肥料として用いられるようになっていたが、少なくとも明末の時期までは、地方的な性格を十分拂拭していなかったことが窺われる。

こうした状況は、遅くとも清代の中期までには根本的に變化している。乾隆『震澤縣志』、乾隆『直隸通州志』等の地方志が大豆等の油粕を肥料とする方法を述べるほか、江蘇省北部の地方志には、大豆粕が肥料として他地域に販賣されたことを傳えているものが多い。⁽⁴⁾大豆粕の肥料としての利用法は、既に定着したものとなっている。

以下、清代中期までに發達した大豆粕の流通をみるわけであるが、その際、大豆のままで運ばれるのか、あるいは大豆粕の形で長江下流域に運ばれるのかをさしあたって問題としない。なぜなら、清代中期の江浙地方の事情を語る『清俗紀聞』や、後の『申報』も言うように、大豆のままで上海などに運ばれる場合も、それらは専ら搾油原料となり、絞り粕が肥料や飼料になったからである。

(ii) 流通の發展

大豆・豆粕流通が發展する足どりは、流通に對する課税制度の整備にみられる。潯墅關では、既に順治一二年の則例中に、諸色の豆とならんで、諸色の餅が、税率の最も高い加補料の項に現われているが、『潯墅關志』の收める高斌の上奏によると、雍正五年の時點で、清朝の造船規制の上限である一丈八尺一ぱいの大船が、大豆を滿載して同關を行き來していた。高斌の上奏は、この動きに對應して、課税基準を整え、税率を引き上げることの追認を求めたものであった。雍正一二年の山東巡撫岳藩の上奏には、江蘇の商船が山東に赴いて江南の貨物を賣り捌いた後、同省の大豆を回送したことが記されている。この上奏は、山東と江蘇の行政機關が連絡をとってこの流通を把握しようとしたもので、翌年には、これに従って、二連印票方式による管理法が作られる。⁽⁵⁾潯墅關に續き揚州關でも、乾隆元年には大豆每石一分の税率が再確認されたのに續き、乾隆一八年以前に、大豆とならんで豆粕も、税率每擔二分とされた。⁽⁶⁾

時代はやや降るが、大豆・豆粕の關税の整備過程が詳細に残されているのは山海關である。加藤繁氏に従って概觀すると、乾隆一四年まで山海關からの大豆輸送は禁止されていたが、同年より、回空の船に限り、大船二百石・小船百石の制

限付きで輸送が公認されるに至った。しかし、この數量制限は、當時の大船の輸送能力に比して餘りにも少なく、官場の腐敗をも生み、ついに乾隆三十七年、大豆・豆粕の海運制限は撤廢された。以後、税率の倍加にもかかわらず、大豆・豆粕の輸送は増加の一途をたどった。各地の常關の税制と税額からみると、遅くとも雍正期から、蘇常地方では、大船による大豆輸送が盛んであり、乾隆期には揚州關・山海關などの税制も整い、海運・河運とも活發に行なわれたことがわかる。

では、大豆・豆粕は、清代中期の商品流通の中で、いかなる位置を占めたであろうか。山海關では、乾隆四五年に、大豆・豆粕税の正額が二萬八千餘兩と定められたが、每石二分二釐の税率よりその量を求めると、およそ一二八萬餘石となり、またその正額は、『嘉慶會典』が示す山海關の總關税額の約四六%を占める。南貨・北貨ともに課税対象であったわけで、東三省から南に向う商品の殆んどが、大豆・豆粕であったことが想像される。

江蘇省の諸關ではどうか。道光元年になされた江蘇巡撫魏元愼の上奏は、揚關の税收の中心は北から來る大豆粕と大豆であるが、同年、河南省西河地方の大豆粕船が來ず、また山東省の運河地帯が不作で、かつ水不足によって運河の走行が滞ったため、徵税の盈餘額が不足したことを述べている。同様な事態は淮關にもみられる。道光元年の達三の上奏は、淮關の徵税の中心は、黄河より運ばれる「豆貨」であり、嘉慶二五年に淮關の税額が不足したのは、黄河の河道不善のため、大豆船が來なかつたことが原因であると述べている。少なくとも道光元年以前には、揚州關・淮關の課税の中心は、大豆・豆粕にあった。この流通ルートについては、嘉慶二一年になされた兩江總督百齡の上奏に詳しい。彼は淮關に屬する十三分口の税額の中心が大豆粕であり、それらは河南省徐州地方から來るもの、山東省から運河を通じて運ばれて來るもの、安徽省北部から洪澤湖を通じて運ばれて來るものより成っていたとする。大運河沿いの淮關・揚州關の課税の中心が大豆・豆粕であった以上、多くの資料も言う通り、同様な位置にある工部常關の宿遷關、蘇常の大農業地帯を控えた泇墅關等でも、事態は同様であった。

乾隆・嘉慶期に於いて、山海・宿遷・淮安・揚州・潁墅の各關の課税の中心には、東三省・山東省・河南省・安徽省北部・江蘇省北部から運ばれる大豆・豆粕があつたことになる。これら五關は、『嘉慶會典』が示す全國の税關の正額中において約三〇%の地位を占める。⁽⁸⁷⁾さらに、安徽省北部から運ばれる大豆粕流通の中心とみられる鳳陽關、海運物資を把握した江蘇海關等でも、大豆・豆粕の比重は高かつたと考えられる。⁽⁸⁸⁾大豆・豆粕は、乾隆・嘉慶期に於いて清朝が把握した、江蘇省南部方面に向う商品流通の中心品目であり、また全國的にみても第一級の地位を占めるものであつた。

しかも、清朝の把握した流通は、全體からみると一部に過ぎなかつた。大豆粕流通の激しいエネルギーは、課税をのがれて進められる非合法的流通に、より端的に現われる。流通制限を抜け出そうとする最も初歩的な試みは船底の擴大である。清朝は船舶の樑頭を水運の課税基準の一つとしたが、潁墅關や淮關では、樑頭を變えずに船底を擴張し、積載量の増加を計る大豆船が多かつた。⁽⁸⁹⁾

一層本格的な非合法的流通は、税關の廻避と、禁止された地域からの海運であつた。嘉慶の後半期には、河南省方面から來る大豆船が、淮關を通らず、洪澤湖の南端から小河を通じて寶應湖・高郵湖へ抜け、邵伯より大運河へと入るルートを通じて盛んに往來してゐた。⁽⁹⁰⁾河南・山東の大豆船が、潁墅關を通らずに、小河川を抜けて直接上海に達するルートを用ゐていることも問題となつた。⁽⁹¹⁾

税關を通さぬもう一つの形式は海運である。山海關においても、解禁以前から盛んに大豆の密移出が行なわれていた。⁽⁹²⁾江蘇省北端の青口も海運密移出口として有名である。同地から大豆關係商品を移出することは永らく禁止されており、乾隆五年、署理江南總督郝玉麟の上奏に従つて大豆の海運が許可されて以後も、大豆粕の移出は依然として認められず、大豆の移出も、縣衙より發給される印單に輸送量や販賣先を記し、移出先の税關の證明と符合させる嚴しい管理制度の下におかれていた。だが、幾百里もの惡路を陸送するとなると、運送費が買い付け價格よりも高くつくため、淮關に赴いて納税の上で内陸輸送をする者などなかつた。⁽⁹³⁾嘉慶八年、兩江總督費淳によつて大豆粕海運の公認が要請される。⁽⁹⁴⁾この上奏は終に

裁可されなかったが、それ以後も決して海運は禁絶されなかった。ひき續いて密移出の防止策が議論されているからである。⁽⁴⁴⁾

清朝の把握した商品流通の中で第一級の地位を占めるに至った大豆・豆粕流通の背後には、清朝の關稅制度ではつかみ切れない、大量の非合法的流通があつた。大豆・豆粕は、清代中期における文字どおり第一級の商品であつた。

(iii) 大豆粕流通と江南農業

大豆・豆粕受け入れの中心地となつたのは上海であり、同地に大豆粕を海運する主體となつたのは、既に明らかにされているように、沙船の商人達であつた。⁽⁴⁵⁾ 上海は三五〇〇隻にもぼる沙船の基地であり、大型のものは三〇〇〇石、小型のものでも一五〇〇〜六〇〇石を積み込むことができた。⁽⁴⁶⁾ しかも、當初は年に二回前後であつた沙船の運航は、年を追つて活發化し、一年に三回・四回と往來するようになる。⁽⁴⁷⁾ これら沙船は、北貨を以て正貨となし、その中心が、大豆三品（大豆・大豆粕・大豆油）であつた。⁽⁴⁸⁾

上海は大豆業とともに發展した。上海には油豆餅業公所、青口鎮の船商達の祝其公所、あるいは北貨行所、更には南行の貨物として大豆・豆粕などを運んだ沙船に對する北行の際のバラスト確保までとりしきる商船會館などが設立された。⁽⁴⁹⁾ 大豆業に直接關係のある會館・公所の設立は、乾隆期から嘉慶期を経て、道光の頃まで及んでいる。開港以後、後述のように、上海の大豆業は急速に衰頹するが、榮光の殘照は容易に消え去らなかつた。民國期に入つても、同市では豆規銀と呼ばれる銀が通行しており、天平稱と呼ばれる大豆油用の秤、萊陽稱と呼ばれる大豆粕用の秤もまだ用いられていた。⁽⁵⁰⁾ 上海における大豆業の位置をうかがい知ることができる。同様な繁榮は、青口にもみられた。⁽⁵¹⁾

沙船の基地は上海であつたが、大豆粕の消費地は、周邊の農村地帯であつた。『安吳四種』によると、上海の沙船は、崇明・通州・海門・南匯・寶山などの地方から集まっていた。⁽⁵²⁾ 郝玉麟の上奏は、青口から海運される大豆の類は、太倉劉

河地方に運ばれたと言ひ、光緒『阜寧縣志』は、太平天国以前、同地から大豆粕が、常州無錫へ海運されたことを記している。他の資料も合わせ、大豆粕を受け入れたのが、蘇州・常州などの農業地帯であったことがわかる。

個々の船商については、今それを詳かにし得ない。『安吳四種』は、一隻七〇〇〇兩する沙船を四〇五〇隻も持つ大船戸がいたという。しかし『一斑錄』雑述は、もう一つのタイプとも言ふべき張用和なる人物の海難記を傳えている。

彼は常熟と太倉のほぼ中間を流れて長江に注ぐ白茆川の河口に住んでおり、恒利號と呼ぶ船を持ち、牛莊や膠州・萊陽などを往復する海運を業としていた。恒利號は嘉慶二年に台風のため漂失してしまふが、張氏は道光の頃には、再び源泰號なる船を以て山東の萊陽に赴き、大豆粕を積み込むのである。大豆・豆粕業の有利さとともに、一隻の沙船をもつて荒海に乗り出す農村「土着之富民」の姿を見出すことができる。

さて次に、こうして運ばれた大豆粕が、該地の農業にどの程度の意味を持つものであつたかを確認しよう。太湖周邊地帯に流入した大豆粕の量を正確に求めることはできない。三千石の沙船について考えよう。容積單位三千石の船に、比重の比較的重い大豆粕が、重量單位にして何擔積めたか、充分明らかでない。今假に、やや少なめであるが、標準的な容積單位一石〓重量單位一擔として、およその水準を検討しよう。

一畝當りの施肥料は、土質・耕起深度などによって大きく異なるが、『松江府續志』が示す、水田一畝當り大豆粕五十斤の割合で計算すると、樑頭一丈八尺の大船の大豆粕は、實に六〇〇〇畝、三六〇ヘクタール餘りに施すことができるということになる。また、この大豆粕を豚の飼料として用い、適切な敷き草を加えて得た厩肥を水田に投入する場合、『沈氏農書』の計算に従うと、二〇〇〇畝、約一二〇ヘクタールに施し得ることになる。また試みに大豆粕の窒素含有量を硫酸アンモニウムに比べると、樑頭一丈八尺の大船一隻の入港は、一〇トン積みの大型トラック四〇五臺の到着に値することになる。

上海には三千五百隻にのぼる大小の沙船が集り、それが盛時には年に三〇四回の往復をしたと傳えられる。北來の貨物

の中心が、大豆・大豆粕であつたわけで、あらゆる誇張を差し引いたとしても、その意義は巨大なものである。しかも先にみたように、大豆・豆粕は、海運だけでなく、安徽省北部・河南省などから大量に河運されており、そこでも北來の貨物の中心であつた。

大豆粕がこれほどまでに廣く行きわたっており、それが清代中期における中心的商品にまでなつていたことは、當時の商業的農業について幾つかのことを示している。

まず第一に、それは、大豆粕を金肥として用いるか、あるいは大豆粕を購入飼料として用いる農法が、清代中期の長江下流デルタ地帯に、廣範圍・一般的に成立していたことを示している。言い換えるなら、大豆粕が相當な支出を伴つて購入される肥料・飼料であることから、當時長江下流デルタ地帯は、販賣のための購買を伴つた高い水準の小商品生産段階に達していたことが明らかとなる。大阪灣岸を中心とする近世日本の畿内では、開港前、既に本源的蓄積が問題とされるまでに、商品生産は發展を遂げていた。これらの地域の農家、とりわけ河内を中心とする棉作農家の中心的な肥料が干鰯であつたが、大阪灣岸一帯への肥料供給の中心となつた大阪の肥料市場に於ける干鰯の入荷量は、近世中期（乾隆五〇年代）において、たかだか一萬俵餘りに過ぎなかつた。⁽⁵⁴⁾ 金肥を受け入れた農業地帯の廣さを考えに入れても、商業的農業の發展に限定するなら、長江下流域の農業は、近世中期日本の農業に、決してひけをとらなかつたと言える。

附言するなら、大豆粕は、従來商品作物として注目されてきた棉作に止まらず、水稻作にまで肥料として用いられている。これは主穀も含めて販賣のための生産が行なわれていたことを裏書きする。

第二に、大豆・豆粕は、華北あるいは東三省方面から、大量に・恒常的に送られて來ていた。これは、長江下流域の商業的農業が、中國北部を肥料生産地としてまき込んでいたこと、つまり、餘剩農産物の一時的販賣でもなく饑餓販賣でもない、各農業經營を基礎的な生産面で把える全國的な市場圈の形成が、長江下流域の商業的農業を牽引車としつつ、既に始つていたことを物語っている。

しかも第三に、大豆粕は「上農」・「富農」等と呼ばれる富裕な農民経営における勞働生産性向上への要求の中から肥料化が進み、そのような階層を中心として用いられた肥料であることは、第一章でみたとおりである。大豆粕の廣範な流通は、これを主導的に使用する富裕な經營の廣がりを示すものである。勿論、大豆粕を肥料として使用することが一般化し、それによって得られる生産力水準が普遍的になるならば、貧窮農民とても、それを使わざるを得なかった。大豆粕の掛け買いは、これを示している。しかし、貧困な階層が商業資本に抱えられ、經營の主體性を失いつつ、より高度な商業的農業に組み込まれていくことは、富裕な經營の經營的擴大とともに、農業のブルジョア的發展の兩側面である。

三 清代後期における流通の變化

(i) 流通の變動と衰退

再び流通に目を移そう。清代中期における東三省・山東省方面からの大豆・豆粕の受け入れ地は長江下流デルタ地帯であったが、乾隆時代も終りになると新しい流通が始っている。寧波を中繼地とする浙江省南部や福建省への再移出である。山東省・奉天省から送られて來た大豆を福建商人が再移出することが、乾隆四九年、青口の場合と同様の印票による管理システムのもとで認められることになった。⁸³五〇年には、再移出量は一票につき一〇〇石と決められ、續く五一年には、福建とともに台州・温州の二府についても、同様な移出が認可された。⁸⁴

だがこれらの新しい移動には限界があった。周知のように、傳統的な中國沙船は、水深が浅くて沙地も多く、かつ波の比較のおだやかな上海以北を航行するには好都合であったが、波が荒く島嶼も多い浙江以南の地域を航海するには不向きであった。後者の海域では鳥船などと呼ばれる堅牢な船が用いられ、兩地域間の融通はなかった。漕糧の海運に際しても、この技術的理由で、閩粵船は運糧に参加しなかった。⁸⁵こうした技術的制約もあって、乾隆期に始った福建地方への大

表Ⅰ 主要港灣間大豆粕移輸入状況（1884年）

		牛 莊	芝 罘	上 海	厦 門	汕 頭
移 輸 出 ①	總 量 (擔)	1,901,013	1,245,601	4,027		
	總 額 (兩)	1,325,871		3,624	—	—
	擔當り價格 (兩)	0.70		0.90		
再移輸出 ②	總 量 (擔)			47,771	5,472	
	總 額 (兩)	—	—	42,995	5,054	—
	擔當り價格 (兩)			0.90	0.92	
移 輸 入 ③	總 量 (擔)			154,397	541,339	2,539,712
	總 額 (兩)	—	—	138,957	513,524	
	擔當り價格 (兩)			0.90	0.95	
差し引き移輸入量 ③-①-②		-1,901,013	-1,245,601	102,599	535,867	2,539,712
		60.4%(-)	39.6%(-)	3.2%	16.9%	79.9%

出典：Commercial Reports from Her Majesty's Consuls in China, 1884.

豆の再移出は、法令も定めるとおり、あくまで再移出に止らざるを得なかった。

ところが清代の後期になると、従来の流通は根本的に變化する。表Ⅰは、大豆粕を取り扱う主要港灣間での大豆粕の輸移出入状況を一八八四年度に關してまとめたものである。これによると、牛莊と芝罘から積み出された大豆粕は、そのほとんどが汕頭と厦門に送られており、兩港の最終的受け入れ量を合わせると、全體の九五%を越えている。これにひきかえ、蘇常の大農業地帯を控え、かつては大豆・豆粕の大量受け入れ地であった上海の地位低下は著しい。總移入量は、流通量全體の5%にも満たず、その移入された大豆粕も、かなりの部分がそのまま再移出されている。表Ⅱは、一八七〇年代における大豆粕の流通を、上海に限定してながめたものである。上海が大豆粕の受け入れ地から、單なる流通の中繼地、あるいは囤積と投機的賣買の地に變化していることがわかる。しかも全體の流通量からみれば、中繼地としての役割も影のうすいものとなっている。

海關統計からみた上海への大豆粕海運の減退は、中國資料からも窺われる。光緒十二年（一八八六年）に編纂された『阜寧縣志』は次のように述べている。

表Ⅱ 上海港大豆粕移輸出状況

		移 輸 出 ①	移 輸 入 ②	再移輸出 ③	②-①-③
1873年	總 量 (擔)	4, 236	250, 698	167, 362	79, 100
	總 額 (兩)	3, 389	200, 558	133, 889	
	擔當り價格 (兩)	0. 80	0. 80	0. 80	
1875年	總 量 (擔)	232, 242	174, 986	207, 247	- 264, 503
	總 額 (兩)	243, 854	183, 736	217, 605	
	擔當り價格 (兩)	1. 05	1. 05	1. 05	
1876年	總 量 (擔)	6, 591	105, 005	29, 347	69, 067
	總 額 (兩)	6, 892	110, 255	30, 814	
	擔當り價格 (兩)	1. 05	1. 05	1. 05	
1877年	總 量 (擔)	1, 068	318, 140	324, 790	- 7, 718
	總 額 (兩)	1, 067	318, 139	324, 790	
	擔當り價格 (兩)	1. 00	1. 00	1. 00	

出典：Commercial Reports from Her Majesty's Consuls in China, Shanghai.

我が清朝が海禁を解かれて以来、商船が群らがり集まった。(中略)當時、八灘・東坎・羊寨・東溝といった町々には、大豆粕や大豆を集めて常州無錫に運ぶ船が帆柱を連ねていたのに、今では皆むかし語りになってしまった。黄河が流れを変え、太平天国の亂が起こつて以来、商人も一般人民も、重ね重ね困窮し、暮らし向きが悪くなったからである。

かつて江蘇省北部から常州無錫の地に運ばれた大豆粕も、今やぼったり途絶えてしまった。

海運とならんで大豆粕輸送のもう一つの動脈であった大運河による輸送はどうであろうか。光緒九年(一八八三年)に著された『續纂淮安府志』は次のように言う。

大豆油と大豆粕は、道光以前には江南地方に賣り捌いて、大きな利益をあげており、關稅收入も、これを高額品目としていた。しかし三十年このかた、收穫がいや増しに減つて、これを仕事にする者が少なくなつてしまった。

かつて安徽省北部・河南省・山東省の各地から大豆粕船が集つた淮關でも、光緒の頃までに、舊の面影は失なわれていたのである。

流通の變化は、大豆粕の利用面からも裏付けられる。確かに光緒期にはいつてからも、江蘇省地域で大豆粕は肥料として用いられている。大規模な流通は減少しても、海關が把握しなかった小口の輸送が続いていたかもしれない。また全國的流通は減少しても、その地でとれる大豆の粕が肥料や飼料として用いられたであろう。光緒二十四年の『農學報』は、播種と田植えに先立って、大豆粕十餅を基肥として用うべきことを記しており、光緒三五年に刊行された『蠶桑萃編』は、桑の肥料として大豆粕が使用されることを述べている。^(m)しかし同書が桑政・論糞類でも言うように、大豆粕は力も強いが、値段が高くて多くは用いることのできない肥料となつてしまつたのである。⁽ⁿ⁾

これに對し、一八六五年、七四年、七八年の牛莊海關報告、John Henry Gray の *China* あるいは、一八八八年のイギリス王立アジア協會の農村調査等は、それぞれの立場から、大豆粕の多くが、廣東・福建に送られ、同地で甘蔗作の重要な肥料として用いられたことを語っている。中でも、一八七八年度の牛莊海關報告は、同地で積み出される大豆粕が汕頭を最大の消費地としており、同地でとりわけ甘蔗作の肥料となつていたこと、同年の大豆粕移出が従來に倍して多かつたのは、前年度の砂糖輸出がなくてなく活發で、その結果、甘蔗作農家での大豆粕需要が増大したためであること、などを述べている。^(m)大豆粕流通が變化した背景として、開港によって結びつけられた外國市場の影響がみられるわけである。⁽ⁿ⁾

(ii) 變動の背景

それでは、大豆粕流通の變動は、いかなる原因によつて引き起こされたものであろうか。

イ 流通條件の變化

まずみなければならないのは、大豆粕をめぐる流通條件の變化である。その第一は、大豆粕輸送業への洋商の參入であ

った。沙船による大豆・豆粕輸送の意義は清朝も認めるところであり、アロー戦争の結果として結ばれた天津條約で牛莊・芝罘が開港された時も、同年上海で結ばれた通商税則善後條約によって、沙船の獨占的大豆粕輸送權が確保されていた。^(m)しかし、大豆・豆粕の交易は極めて有利なものであった。しかも、牛莊等で大豆・豆粕の積み出しが認められねば、イギリス商人は、南行に際して船の安定のため土砂などを積んで歸らざるを得ず、往路・復路ともに積み荷のある中國船に比べて二倍のコストをかけねばならなかった。⁽ⁿ⁾その結果、洋貨の競争力が低下するという事態が生じた。その上、牛莊・芝罘等では、南から運ばれて来る商品と大豆・豆粕とのバーター取り引きがなされていたため、洋船の營業活動にとつて、大豆・豆粕を取り扱うことは不可缺であった。

このため、芝罘のイギリス商人を中心に、制限の撤廢を求める強い運動が繰り廣げられた。これに對して清朝は、幾度か拒否の態度を示したものの、太平天国鎮壓という當時の至上命令のため、「中國商船之利」は投げ捨てられ、同治元年正月、恭親王の大豆・豆粕解禁を求める上奏は裁可せられた。^(o)

以後、李鴻章らの度々の奏請にもかかわらず、この政策は維持され、その結果、牛莊での買い付け價格が上昇し、資本の少ない沙船業者は取り引きから排除されることになった。^(p)しかもこの價格上昇は、洋船の登場を基礎とする新市場の開發によって裏附けられていた。前述のように、乾隆後期には大豆の福建方面への移出が始っていたが、それは造船技術にも規定されて未だ中繼移出の段階に止っていた。洋船の登場は、こうした條件を變えた。淺水域の航行には、洋船も向きであったが、強い資力で現地の沙船を使って大豆粕を買い付け、優れた航行能力にものを言わせて敏速な輸送を行ない、福建・廣東を上海と同様な市場條件に引き上げた。洋船の參入による大豆粕價格の上昇・新しい航海技術による新市場の登場、これが流通條件變化の第一であった。

しかしこれだけでは、廣東・福建市場の出現と江蘇方面の相對的地位低下を説明するものではあつても、價格上昇のもとで、他の地方からの流入が停滯したことの説明としては不充分である。ここにもう一つの要因がある。釐金の創出であ

る。かつて大豆粕の消費地であった江蘇省において、釐金は咸豐四年に始められた。既に羅玉東氏の研究によっても明らかにされているように、江蘇省と浙江省の釐金は最も厳しいものであった。太平天国鎮壓のため、清朝は最も商品生産の進んだ地域から集中的に釐金を徴収した。

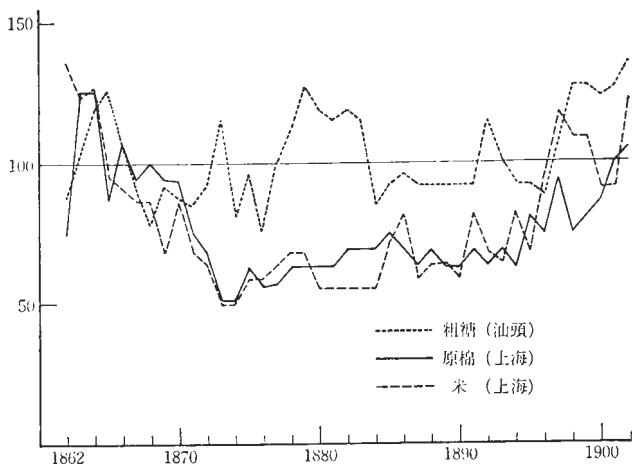
大豆關係について具體的に検討しよう。咸豐四年に釐金が設けられた時には、その税率は比較的輕く、大豆一石につき錢四文、大豆粕每片二文であった。しかし同七年の税率引き上げ、同治元年に實施された釐金の銀立てへの變更等が重なり、光緒元年の時點で、釐金創設當時に比べ大豆で三〇倍、大豆粕で十餘倍の課税がなされるようになっていた。⁸⁴⁾しかも當時、不景氣の原因として釐金に非難が集中し、米穀等については、少なくとも法令上は税率が輕減される方向にあった中で、大豆三品は主穀ではないとの立場から、獨り減免の對象からはずされていた。⁸⁵⁾光緒元年、上海の商人達によって大豆三品に對する釐金撤廢のキャンペーンがなされるが、それによると、大豆で二〇%、大豆粕の場合、試算によると二十數パーセントの課税がなされていたことがわかる。⁸⁶⁾加えて、江蘇省南部一帯には、私設の釐卡が無數に作られており、額外の釐金が徴収されていた。⁸⁷⁾最も被害が多かったのが、河南・安徽等からの河運であったことは疑いを容れない。長い流通路に沿って、毎關徴收の原則で釐金⁸⁸⁾がとられるなら、肥料としての流通は不可能となったであろう。

洋商の參入・釐金の創出という要因は、いずれも、從來の大豆粕消費地である江浙地方に、とりわけ深刻な打撃を與えた。この結果、かつては稻⁸⁹⁾わらに等しいと言われた大豆粕が、『益聞錄』も言うように、流入量が減少し、高價で使用する困難なものとなつてしまつたのである。⁹⁰⁾

ロ 生産物價格の下落

大豆粕流通激變の背景には、大豆粕自身の流通條件の變化があつた。しかし、變動の背景として、かつてその流通を支えた長江下流域の農業の經營條件に關する他の諸要素も見のがし得ない。その一つは、かつて該地の商品作物の中心品目

上海・汕頭における米・棉・粗糖の價格變動 (1862~1902)



China, The Maritime Customs, Decennial Reports on Trade, Industries, etc, 1892~1901

ibid.,

1902~1911

60年代の平均を100とする指數表示

に敷えられた米と棉花の價格が下落したことである。

まず棉花から。『一斑錄』は、清代後期蘇州地方における物價變動を比較的詳しく残しているが、それによると、乾隆・嘉慶期を通じて上昇傾向にあった棉花の價格が、一八四〇年代初頭を最高に、四四年（道光二十四年）以後、急速に下落し始める。所謂南京木棉として一八三〇年代初期には海外市場まで持つに至った江蘇省の棉業は、アヘン戦争敗北以後、イギリス棉布によって、その商品生産としての發展水準の高さ故に、他地域に比べて急速かつ深刻な打撃を受けねばならなかった。『一斑錄』の棉花價格變動は、洋布の流入と完全に一致している。同様な價格變動は、米についてもみられる。『一斑錄』は、乾隆・嘉慶を通じて上昇傾向にあった米價が、嘉慶の末を境に、次第に低落することを示している。米價・棉價とも約五〇%の落ち込みがみられる。

『一斑錄』の記述は一八五〇年代の初めて終わっているが、それ以後はどうであろうか。グラフは、海關報告によって、上海での米と原棉、汕頭での粗糖という三つの商品の價格變化を求め、指數で示したものである。これによると、新しい大豆粕消費者である汕頭の甘蔗作農民の作り出す砂糖は、一八七〇年代

から八〇年代を通じて高い水準を維持するのに比べて、米價・棉價ともに、同治・光緒期に入ってから、前代以來の低下傾向を續け、いずれも六〇年代の半分近くまで落ち込む。八〇年代後半期より、兩者の價格は上昇に轉ずるが、六〇年代水準を回復するのは、一九〇〇年代になってからである。しかも當時はインフレ傾向にあり、馮桂芬らも言うように全般的な物價高の中で、米と棉花のみが安いということになって、米や棉花を販賣目當てに生産している農民は深刻な影響を受けた。

ハ 勞賃の上昇

先に、「上農」的經營方法の特色として、勞働生産性の高い肥料の使用、廣い經營面積などとならんで、他人の勞働力の雇傭をあげておいた。經營條件の變化は、この面でも起きた。資料的には、次のように現われる。

乾隆・嘉慶の時代には、農民は耕作に勵み、よく法に服していた。咸豐同治以後は、耕作をなまけ、法をないがしろにしている。町の近くに住む農民は、小作料の不拂いを習慣としており、長工の勞賃も昔に比べて倍加した。

では、具體的にどの程度の上昇であつたろうか。『中國近代農業史資料』所收の刑部檔案は、江蘇省の二つの月工の例を残しているが、それらは各々三〇〇文、五〇〇文で備われている。清代中期の同地方の事情を表わす『清俗紀聞』が、農村の月奉公人の給料が三〇〇文程度であつたと言ふのと一致する。『中國近代農業史資料』に收める他の檔案例も、毎月三〇〇～六〇〇文程度であり、限られた例からではあるが、當時の農業勞働の賃金が三〇〇文～六〇〇文程度であつたことがわかる。

ところが同治・光緒期になると、この水準は大きく變化する。光緒『烏程縣志』、イギリス王立アジア協會の調査、『申報』、『宦吳粟牘』などには、當時の長江下流域における雇傭勞働に關する資料が残されている。それらは個別の雇傭例ではなく、いずれも當時の水準を示すものであるが、季節性や地域性を反映してか、かなりのばらつきを示している。しか

し、一日一〇〇文〜二八〇文というその値、とりわけ中心的に出てくる二〇〇文前後の値を乾隆期の水準と比べるなら、相當な勞賃の上昇があつたことを示すには充分である。同様な勞賃の上昇は、農業以外の面での勞賃についてもみられる。こうした勞賃上昇の背景を、ここで全面的に明らかにすることはできないが、太平天国以後、長江下流域では、湖南・安徽などからの客民の流入にもかかわらず、人口の減少が著しかったことは事實である。農村の荒廢、農業人口の減少、勞働力の減少が諸物價上昇という全國的要因とともに、勞賃の上昇に結びついたことは、容易に想像される。

以上の概觀に従うなら、乾隆・嘉慶期を通じて比較的利益な條件に恵まれていた長江下流域の農業經營は、主要な肥料あるいは飼料であつた大豆粕の流通條件の變化と、それによる價格上昇、生産物價格の下落、雇傭勞賃の上昇という困難要因に遭遇したことになる。しかもこれらの條件は、第一章でみた「上農」あるいは「富農」と呼ばれる階層の主要な經營條件を、いずれも困難におとし入れたことになる。

昔は人を備つて耕作しても、その費用はまだ安かつた。今では勞賃が高くなり、食物も昂騰し、一畝當り二千文もかかる上に、肥料代二千文が加わる。農民は自分自身で耕作するか手聞がえをすれば、支出合計を少しは減らすことができるかもしれない。¹⁰²

勞賃や肥料代の上昇のもとで、これまで他人の勞働力を雇傭していた經營も、自作を行ない、あるいは勞働力交換をするなどして、經營を後退させざるを得なかつた。大豆粕流通の變動の背景には、長江下流域の農業經營の全面的後退、なかでもこれまで大豆粕の主導的消費者となつてきた雇傭勞働や金肥を用いる農業經營の後退があつた。

小 結

大豆粕の肥料化は明代の中期に始つていたが、清の乾隆・嘉慶期になると、合法・非合法の流通を合わせて、全國的にみて最も主要な商品となるまでに普及し、長江下流域の農家の間で、肥料として・飼料として、廣く用いられるようにな

った。當時の農業の基幹的作業である施肥労働に社會的分業の楔が打ち込まれ、肥料製造のための労働が分離され、商業資本によって結合されたわけである。言い換えるなら、東北地方・山東省・河南省・江蘇安徽兩省北部方面での大豆栽培、長江下流域での大豆粕を使用するの農業經營が、いずれも恒常的な販賣のための生産體系に組み込まれたわけである。大豆粕の尠大な流通は、少なくとも長江下流域地帯は、販賣のための購買を伴った高度な水準の小商品生産段階に達していたことを示している。かかる恒常的な販賣のための生産は、生産物が多かれ少なかれ價值どおりに賣られることを前提とする。小商品生産段階を基礎として、他人の労働を雇傭して販賣のための農業を營む上農・富農經營が展開しつつあった。金肥の廣がり、このことをも示している。

第三章では、開港を前後として、金肥の流通が大はばに後退することを確認した。その背後には、洋商の參入や釐金の創設による大豆粕價格の上昇とともに、生産物價格の下落や勞賃の上昇のもとで引き起こされた長江下流域の商業的農業の後退があった。ここで二つのことに注目したい。一つは、商業的農業の後退現象が、開港による外國商品の進入、太平天国を境とする清朝の「封建」反動政策に起因していることであり、いま一つは、これらの衝擊が效果を持つには、先にみた清代中期における小商品生産段階到達が前提になっていることである。開港後の生産物價格の下落が該地の農業に打撃を與えるためにも、釐金收奪が效力を持つためにも、販賣を不可缺の前提として農業が營まれていることが必要である。勞賃の上昇が深刻な問題となる前提には、廣範な勞働力の賣買にまで進んだ社會的分業があった。長江下流域地方は、小商品生産段階到達の故に、深刻な打撃を受けた。

河南・安徽・江蘇北部からの大豆粕流通が途絶したこと、大豆粕がやがて専ら日本向けの商品となったことは、洋布の流入と同様、これまで國內市場の發展を支えた商品流通が、外國市場との連續のために切斷されたことを意味する。長江下流域の農業が持っていた國內市場における有利な地位は後景に退いた。高い水準にまで達した小商品生産は、雇傭労働から自家労働への引きもどし、金肥から自給肥料への引きもどしという形で、後退を餘儀なくされる。開港と清朝の「封

建」反動政策は、一八六〇年代から七〇年代にかけて、早くも先進地帯の生産關係を變革し始めていた。それは、ひとま
ず、自生的なブルジョア的發展にとって抑壓的に現われる。

註

- (1) 『史林』六一卷一號 一九七八年一月。
『文膽』通論一
- (2) 假如一人買田百畝。其佃種者必有七八戶。工本大者。不能過二十畝爲上戶。能十二三畝者爲中戶。佃能四五畝者爲下戶。
- また、同書 通論一には
- 一畝之田。耒耜有費。籽種有費。……約而計之。率需錢千。一畝而需千錢。上農耕田二十畝。則口食之外。耗於田者二十千。
- (3) 例えば乾隆『烏青鎮志』卷二 農桑
四月望至七月。謂之忙月。富農僱傭耕。或長工。或短工。佃農通力耦犁。日伴工。
- (4) 光緒『松江府續志』卷五 疆域志 風土
肥田者俗謂膏壟。上農用三通。頭通紅花草也。然非上等高田。不能撒草。草子亦畝須四五升。二通背壟。多用豬踐。畝須十擔。三通用豆餅。畝須四五十斛。
- (5) 咸豐『南潯鎮志』卷二 農桑 所收
草既淨後。加以肥澤之功。謂之下壟。富家多用豆餅。椎碎成屑。勻撒苗間。貧家力不能致餅。則用豬羊欄中腐草。
- (6) 『滬城歲事衢歌』
- (7) 下農種木棉三五畝。官租之外。償債不足。
光緒『松江府續志』卷五 疆域志 風土
若貧農。祇餘豆餅壟田。
- (8) 例えば『補農書』總論 佃戶
吾里田地。上農夫一人。止能治十畝。
- (9) 前掲拙稿參照。
- (10) 『補農書』補農書後 壟麥菜
近年人工既貴。儉情復多。澆糞不得法。則不若用餅之工糞兩省。
- (11) 嘉慶『黎里志』卷二 形勝
鎮之東曰東柵。每日黎明。鄉人咸集。百貨貿易。而米及油餅爲尤多。
- (12) 天野元之助『中國農業史研究』第一章 水稻作技術の展開
參照。
- (13) 『便民圖纂』卷一下 墾竹枝詩。卷二 耕穫類。
- (14) 天啓『海鹽縣圖經』卷四 縣風土記。
- (15) 『農政全書』卷三五 蠶桑廣類 木棉。
- (16) 『天工開物』中卷 膏液第一二卷。上卷 乃粒第一卷 稻宜。同前 稻宜。
- (17) 『閩世編』卷七 食貨二。

(19)

『補農書』補農書後

余至紹興。見彼中俱簍菜餅。每畝用餅末十觔。……吾鄉有

簍荳餅屑者。更有力。每簍子一升。入餅屑二升。……

(20)

乾隆『震澤縣志』卷二五 風俗 一 生業、

乾隆『直隸通州志』卷一七 風土志、

嘉慶『如皋縣志』卷六 物產 黃豆、

『崇川咫聞錄』卷一一 物產錄、

『木棉譜』など多數。

(21)

嘉慶『高郵州志』卷四 物產

豆餅(豆液作油。滓作餅。外郡買以治田。)(一)は割註。

以下同様。)

嘉慶『如皋縣志』卷四 物產

油(菜子豆棉。俱可搾油。油坊之息。本多者富。)油餅(油

渣成餅。壅田肥。貿遷江南。其利不貲。凶歲兼可充腹。)

(22)

『清俗紀聞』卷二 居家

大豆一升同(錢)十五六文。專油を搾留用と須。

(23)

『申報』光緒元年五月初四日 吳元炳片

黃豆一項。本省產無幾。大半運至關東山東。專爲碾取豆油

之用。豆餅亦係培養種植。

(24)

道光『浙野關志』卷五 順治十二年貨物則例。

(25)

同前 卷五 榷稅則例

浙關則例。如豆稅一項。名曰加補料。有樑頭小販之分。小

販則例。每石稅銀七分。樑頭一丈八尺者。稅銀六十七兩三

錢。……據山陽江都樑頭船戶呈稱。丈八之船。原照則例。

納銀六十七兩三錢。後因有將船改造深寬者。是以往年有均

鈔之請。以簽量攢數。作樑頭丈尺。如丈八樑頭。以二千九百八十二石爲率。納銀七十七兩五錢三分。合計每石二分六釐。……

(26)

『雍正硃批諭旨』岳潯 雍正十二年八月八日。

(27)

『乾隆大清會典則例』卷四八 戶部 關稅下、雍正三年。

(28)

『乾隆大清會典則例』卷四八 戶部 關稅下、乾隆元年。同

卷四七 戶部關稅上、揚州關。

(29)

『康熙乾隆時代に於ける滿洲と支那本土との通商について』

「滿洲に於ける大豆豆餅生産の由來に就いて」(『支那經濟史考

證』下 所收)

(30)

『山海鈔關權政便覽』卷二 豆稅 黃豆定額事。

(31)

同前 豆稅 試收豆稅事。

(32)

『嘉慶大清會典事例』卷一八七。

(33)

『史料旬刊』第三四期 清道光朝關稅案 魏元焯摺。

前後兩任少收銀三萬九千八百六兩三錢零。緣揚關由關。向

以北來餅豆爲大宗。本年豫省西河餅豆重船。自春迄秋。北

來者甚屬有限。又東省附河一帶。及徐屬邳州各處。歲收數

薄。商販無多。兼之五六月間。雨澤稀少。附關支河汊口。

時形淺澁。南北貨船。難于行走。以致關開徵收盈餘短絀。

(34)

『史料旬刊』第三三期 清道光朝關稅案 達三片。

再查。向來准開稅課。以黃河豆載爲大宗。上年五月十二日。

新季開徵以後。豫省餉工。尚未合龍。宿遷一帶。黃水斷流。

西河豆船。不能運載來關。稅課日形短絀。

(35)

『續纂淮關統志』卷六 續纂令甲

淮關分口。如仲周閘草灣永豐茶菴流均軋東長山白洋新河後

湖廟灣等處。共十三口。均歸入大關額內。向以豆餅爲大宗。豆餅出產之處。自豫東徐州而來者。謂之西河。自東省運河而來者。謂之北河。自鳳嶺洪湖而來者。謂之南河。豫東有收。則商販輻輳。歲數則商販稀少。

(36) 『大清實錄』乾隆五十八年五月

癸巳。諭。戶工二部議覆。淮宿等關。徵收稅課。一年期滿。比較五十五年。共短少盈餘銀十二萬九千五百餘兩零。……第念。該關稅課。全賴山東河南等處豆貨販運南來。錢糧始能豐旺。上年河南山東。均有少雨之處。豆收不能豐稔。又半爲本地民食所需。以致豆貨船隻。到關稀少。盈餘短絀。尙屬實在情形。

同様な資料を、淮宿兩關についてあげると、『史料旬刊』第四〇期 清道光朝關稅案 長良摺。『大清實錄』乾隆四十一年三月辛丑。同乾隆五十六年五月丁酉。同乾隆五十七年閏四月戊子。潛墅關については『大清實錄』乾隆五十八年五月に次のようにある。

辛丑。……第念。該關〔潛墅關〕稅課。以米豆爲重。上年川湖米船到蘇。不及前數年之絡繹。豫東二省歉收。豆船來蘇亦少。以致盈餘短絀。尙屬實在情形。

(37) 『嘉慶大清會典事例』卷一八七・八八 戶部關稅、同書卷七一〇 工部關稅。

(38) 『大清實錄』乾隆五十六年六月己未には、鳳陽關について次のようにある。

第念。該關稅務。全賴上游豫省米豆船隻。赴江販運。

(39) 潛墅關については註(28)參照。淮關については、『續纂淮關統

志』卷七 則例 扞查船貨例に、次のようにある。

各河豆船。有時古兩種。時船面窄底寬。古船面寬底窄。

(40) 『續纂淮關統志』卷六 續纂令申 嘉慶一六年一〇月三〇日 兩江督院百〔齡〕片

但查。該關稅務。全仗北來豆船。而各商由河南等處。販買南來。從洪湖行走。俱應由運河下。達淮關納稅。奴才訪查。洪湖南畔。有清河盱眙連界之一山子地方。可以徑過蔣家垸。垸下由觀音寺一帶小河。入高寶湖。即從邵伯出口。仍入運河。又有山陽縣屬之周家橋草澤河歸岔河鎮。亦爲入高寶湖之路。

調査の結果、この偷越はほとんどないと言われたが、百齡は二ヶ所に税口を設けることを奏請している。また、『光緒大清會典事例』には、次のようにある(卷二四〇、嘉慶二〇年)。

又議准。鳳陽潁州一帶所出豆餅。應由洪澤湖載運南來。赴淮關投稅。毋許徑走臨淮關鈔路南下。淮關監督。仍遴派妥役。渡湖巡查。以杜偷越。

(41) 『同治戶部則例』卷四〇 關稅 巡查偷越

一。豫東販赴蘇松一帶銷賣之豆雜等貨。例由潛墅關納稅。其有由甘泉縣之六閘。盤入通州泰州內河。繞至滕家壩等處。分剝出江。并從通州泰州鹽河之任家港出口。直達上海。……均令各該地方官。稽查嚴禁。并於黃田港。添設巡船。駐守巡查。毋得隱漏。

『光緒大清會典』卷二四〇によると、これは嘉慶二〇年の禁令である。

(42) 『山海鈔關權政便覽』卷二 豆稅 試收豆稅事 乾隆四〇年

四月監督福德任內准盛京將軍咨。

(43) 『大清實錄』乾隆五年四月乙酉

戶部議覆。署理江南總督郝玉麟等奏。贛榆一縣。民間所賣。惟黃豆雜糧。本地難以銷售。必須船載至太倉劉河地方。各省客商湊集。採買甚夥。但內河道遠。運費浩繁。惟出青口對渡。直抵劉河。販運較便。懇來海禁甚嚴。今請弛海禁。官給印單爲憑。自不至有私載偷漏情弊。等因。

(44) 『安吳四種』卷二七 齊民四術 卷三 農三 青口議

油與豆餅。皆屬奉禁出口之貨。然從未見其陸運赴淮。則其由海來往。不問可知。蓋產貨者農。而運賣者商。若遵例繞淮南下。陸路近者百餘里。遠者三百里。又係村莊小道。不通大車。計其運腳。浮於買本。

(45) 『續纂淮關統志』卷六 令甲

〔嘉慶〕八年三月。戶部議奏。江督費〔淳〕奏。贛榆縣生員吳昌善。前在都察院呈控。准關禁止豆餅。不准附載豆船。由青口對渡劉河。銷售一案。該總督請。將豆餅一項。載入戶部則例。准其由青口對渡。在海關驗稅賣。查……豆餅爲粗重肥田之物。既非他邑之必不可少。亦於贛榆之所利甚微。該生還涉京師。急急上控。其意存夾帶私貨。偷漏稅課。已可概見。……奉旨。部議甚是。……嗣後着仍遵照舊定章程。督飭稽查。欽此。

(46) 『光緒大清會典事例』卷二四〇 嘉慶二〇年。

(47) 沙船については、山口廸子「清代の漕運と船商」(『東洋史研究』一七一—一九五八年)、上野康貴「清代江蘇の沙船について」(『鈴木俊教授還暦記念東洋史論叢』一九六四年)参照。

(48) 『安吳四種』卷一 中衢一勺卷一 海運南漕議

沙船聚于上海。約三千五百艘。其船大者。載官斛三千石。小者千五六百石。船主皆崇明通州海門南匯寶山上海土著之富民。每造一船。須銀七八千兩。其多者。至一主有船四五十號。故名曰船商。

(49) 『皇朝經世文編』卷四八 謝占壬「古今海運具宜」。『瀛海雜志』卷一。

(50) 『李文忠公全集』奏稿一 上海一口豆石請仍歸華商裝運片。

註(50)岳濬の上奏は、

再查。豆船一項。由東省販運江南者尙少。惟江南販貨。來東發賣之後。即買青白二豆。帶回江省者。十居六七。

とのべる。この間の變化が、流通の發展を示している。

(51) 民國『上海縣續志』卷三 建置下 會館公所 所收の、商船會館・萃秀堂(油豆餅業公所)・祝其公所(海州贛榆縣青口鎮船號商公捐)・南阜公墅(北貨行公所)。北行の際のラストについては、『安吳四種』所收の「海運南漕議」や『江蘇省明清以來碑刻資料選集』四七八頁なども参照。

(52) 民國『上海縣續志』卷七 風俗
中外未通商以前。南市以豆業爲領袖。至今市用銀兩。通行豆規。而米麥行肆所用斗斛之較準。猶豆業操其權。

同卷所收の「豆規銀」「天平稱」「萊陽稱」についての解説参照。

(53) 光緒『贛榆縣志』卷三 建置

青口。自乾隆五年以前。但數者勿問。其它商船一切封禁。聞諸故老。其時竄海民居數百家。落落可數也。既大吏題請

運豆太倉劉河。報可。於是戕舸大編。往來南北。廢著者贏利三倍。市廛甚盛益興。游手空食之民。仰餘瀝其閒者。以數千計。稱便利矣。

また『安吳四種』卷二七 齊氏四術第三農三 青口議 参照。

54 註(4)参照。

55 註(4)参照。

56 註(4)参照。

57 註(4)(4)など参照。

58 『一斑錄雜述』一 漂泊異域

白茆海口。在張墅東十里。有張用和者。其家素以泛海爲業。

每至關山東(山海關東牛莊等處。山東膠州萊陽等處。)生理。嘉慶二年。有船號恒利者。漂失無踪。……後於道光三

年九月。張氏又有一船。號源泰。已至山東萊陽銷貨。又置

豆餅羊皮水梨等貨而返。遭颶倒拖太平籃。

59 註(4)の『安吳四種』は、大型沙船の積載量を三〇〇〇石(容積單位)とする。これは註(4)の『滄墅關志』が示す、一丈八尺

の大船二九八二石と一致する。

60 註(4)参照。

61 『沈氏農書』六畜 養豬六口の條、および同書 運田地法

羊廄宜於地豬廄宜於田の條によると、大豆粕一〇觔當り一擔の

肥料が得られ、大豆粕一五〇觔程度で水田一畝分の肥料を生み

出す。前掲拙稿参照。

62 大豆粕の肥料要素含有率、及び大豆粕と硫酸の肥效について

は、滿鐵調査部『改訂 豆粕の飼料化に就いての考察』参照。

63 古島敏雄『日本農業技術史』(著作集五四三頁以下)、山崎隆

三『地主制成立期の農業構造』など。

64 平野茂之『大阪靱肥料市場沿革史』二二頁参照。

65 『嘉慶大清會典事例』卷一九一

〔乾隆四十九年〕又覆准。山東奉天二省豆石。商民運到浙

江寧波鄞港銷售有餘。准福建商船購運回閩。令鄞縣驗明豆

數。填給印票。並於船照內。註明裝豆數目。運回何處。貿

易字樣。赴浙海關納稅。出口時。防守汛口員辦印戳。掛驗

放行。仍按月造冊。關會福建進口處所稽查。如有遲久不到。

及到口查驗。無豆石者。即行查究。

66 『嘉慶大清會典事例』卷一九一。

67 この間の事態を示す資料としては、『安吳四種』第一 中衢

一勺卷一 海運南漕議や、『皇朝經世文編』卷四八 謝占王

行船提要などが有名である。

68 總稅務司の把握にもとづく表Ⅰが流通全體ではなからうが、

その量は極めて大きく、全體を反映していると考えられる。大

豆粕を扱う港は表のとおりで、年度によっては寧波などが受け

入れ地として加わる。再移出量を移出量に加えると、移入量の

總合とはば一致し、再移出が、主要港灣内で完結していること

を示している。

69 光緒『阜寧縣志』卷一 疆域 恆產

國朝海禁初開。商船雲集。……其時八灘東坎羊寨東溝諸鎮。

集運餅豆常州無錫者。帆船相屬。今皆視爲陳蹟。蓋自河徙

軍興後。商民重困。生計蕭條。

70 『續纂淮安府志』卷二 物產

豆油豆餅。道光以前。轉販江南。獲利爲厚。權關亦以此爲

鉅款。三十年來。收穫益豐。業此者少。北人之佃於南者。又教以植豆榨油。所在浸靡。油餅南運者益稀。

榨油技術が道光以後に南傳したという判斷は事實に反する。

- (7) 『農學報』第三二期 各省農事述 (『中國近代農業史資料』第一輯五九一—九二頁)

(江蘇丹徒縣) 播種下秧。其日必先下灰糞。鬆泄其土。種後約半月。磨豆餅爲屑投之。每餅約八十文。畝有十餅。苗即壯盛。獲可至四石。糞則不拘時日。愈多愈妙。

- (72) 『蠶桑萃編』培殖類 積物。

- (73) 同前 桑政 論糞類 糞性

豆餅者油之餘也。性滑能化乾燥。長物最易。惜價昂。不能多用。

- (74) *Reports on the Trade at the Ports in China for the year 1865*, Newchwang, p. 15. *D° for the year 1874*, Newchwang, Exports, Bean-cake. *China Imperial Maritime Customs, Reports on Trade at the Treaty Ports, for the Year 1878*, Newchwang, Export trade, Bean-cake. John Henry Gray, *China, A History of the Laws, Manners and Customs of the People*, 1878, London, chap. XXII, p. 136. A Report from Miss A. M. Field, American Baptist Mission, Swatow, Kwangtung, in "Tenure of Land in China and the Condition of the Rural Populations," *Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society*, Shanghai, New Series, vol. XXIII, For the Year 1888, p. 111.

- (75) *China Imperial Maritime Customs, Reports on Trade at the Treaty Ports, for the Year 1878*, Newchwang, Export trade, Bean-cake.

Bean-cake, 1, 924, 968 piculs, is more than double and in two instances, treble the quantity even before shipped hence in Foreign bottoms. The receivers were Shanghai, Foochow, Amoy and Swatow, the latter port being the largest consumer. Bean-cake is largely used as a fertilizer for crops of Sugar and Rice, particularly the former, and the increase in the quantity shipped was due, 1st, to the fact that Sugar cultivation at Swatow and elsewhere had received a great impetus from the previous year's unprecedented shipments to Great Britain, the United States, and Australia, and that consequently an extraordinary demand arose for its fertilizer.

- (76) 二〇世紀に入るや、外國市場の影響を受けて大豆粕流通は再ち大變化する。東北に産出する大豆粕の八〇%〜九〇%が日本に輸出せられることとなる。(滿鐵地方課 商工調査第二號『商工業上ヨリ見たる滿洲の大豆』一五頁参照)

- (77) 中英通商章程善後條約 第五款

又豈石荳餅。在登州牛莊兩口者。英國商船。不准裝載出口。其餘各口。該商照稅則納稅。仍可帶運出口。及外國俱同。

- (78) *Commercial Reports from Her Majesty's Consuls in China, for the Year 1862*, "Report on the Consular

District of New-chwang, with particular reference to its Commercial Capabilities," November 18, 1862, p. 6.

- 79 『籌辦夷務始末』咸豐朝卷七四 咸豐十一年二月盛京將軍王明等の上奏

即如牛口通商一條。奉省銀錢難貴。向來海口商船貿易。俱係以貨兌換豆石。今夷船來此通商。如欲以貨兌換銀錢。必無售主。貨不能銷。

同様な芝罘における「バター取り引きに ついては」 Britten Dean, *China and Great Britain. The Diplomacy of Commercial Relations, 1860—1864*, Harvard East Asian Monographs, 50, 1974, p. 80.

- 80 Britten Dean, *op. cit.*

- 81 『籌辦夷務始末』同治朝卷四 同治元年正月二日

恭親王等又奏。據英國公使威妥瑪稟稱。如欲北洋海口完固。莫如將豆貨開禁。則商賈輻湊。外國不能不保守該口。……

臣等查。天津和約。禁止洋商販運豆石出口。原因恐分中國商船之利。並有妨民食。現值南方不靖。賊勢方張。沿海口岸。兵力尙單。外國如能協防。亦可稍張聲勢。……復查。洋船販運豆石。原以壓裝回南。並非運出外國。其於內地民食。亦無大損。現欲資其協衛。似不得不略從寬大以示羈縻。……御批。依議。

- 82 『李文忠公全集』奏稿一 上海一口豆石請仍歸華商裝運片、

奏稿七 北洋豆貨上海一口請歸華商轉運摺、奏稿七 收回北洋豆利保衛沙船片。

價格の具體的變化は、*Commercial Reports from Her*

Majesty's Consuls in China, for the Year 1862, "Report on the Consular District of New-chwang, with particular reference to its Commercial Capabilities." *3^d Decennial Reports on the trade, Industries, etc, 1892—1901*. と比較参照。

- 83 現地船の大豆粕集荷について *Commercial Reports from Her Majesty's Consuls in China, for the Year 1875*, Chefoo. 参照。沙船に比した輪船の有利では言ひまじなうが、*Commercial Reports from Her Majesty's Consuls in China, for the Year 1874*, New-chwang. 参照。

- 84 羅玉東『中國釐金史』第三章 第七章。

- 85 『申報』光緒元年一〇月二日 告白

伏查。咸豐四年十一月。上海初定釐捐。豆每石錢四文。餅每片二文。油每簍五十六文。七年加作荳每石二十文。餅每片六文。油每簍一百八十文。同治元年。改捐庫平銀。荳每石七分五釐。餅每片一分八釐。油每簍三錢五分。時因年需孔亟。至次年。而油荳餅各增捐一倍。後以軍務漸平。一再核減。仍照同治元年捐數。至今遵辦在案。然較之咸豐四年初定釐捐時。油餅尚增十餘倍。荳則增至三十餘倍。然此僅滬市落地損也。爲他邑所無。若販運至浙。沿途之卡捐。更□倍於此。

- 86 『申報』光緒元年五月四日 京報全錄 吳元炳上奏。

- 87 『申報』光緒元年一〇月一九日 書紳商公稟後

核計豆子。每石身本。不過二千餘文。而由牛莊販來。每關擔納稅六分四釐七毫。到上海。再完進口。每擔四分七釐。

連往別處者。再加落地捐。每石八分二釐五毫。試由報落地捐後。連過閭巷。則卡捐每石錢八十八文。又加船捐錢十文。以後所過蘇屬各卡。均每石捐錢四十文。統計在蘇屬銷賣。每石已在四百文左右。核之身本。幾至加二矣。若豆油則更大。牛莊到蘇屬。每擔約一千三百餘文。豆餅每片約一百三十餘文。

大豆粕への課税については註67。牛莊における大豆粕價格については註68の資料。銀錢比價については、民國『郵縣通志』食貨志「歷年正輔幣兌價」。東北產大豆粕一個の重量については、「松江府續志」卷五 疆域志 風俗の大豆粕の説明。以上をもとに計算すると、およそ二六〇二七%となる。

例えば『大清實錄』同治元年七月庚戌。

『益聞錄』光緒十九年癸巳五月二五日 姉娼峯青

江陰市上。女紅所績。以布爲生涯。農夫糞田。以豆餅爲常事。近日布市大衰。而田中窘擁勢難。損而不用。無如來數甚少。比較往年販運而來者。祇得十分之三。價亦因之大漲。市中出售。計豆餅每擔需洋銀一元六角。青青秧畝。向待滋培。小民大爲拮据云。

『申報』光緒元年一〇月一九日 書紳商公稟後

鄉間肥田之物。又以豆餅太貴。而皆不用矣。

また註69参照。

『一斑錄雜述』卷六 米價 棉花價。

『安吳四種』(卷二六 齊民四術 農二 答族子孟開書)で

包世臣が

松太利在棉花梭布。較稻田倍徙。雖暴尙可支持。近日洋布

大行。價才當梭布三之一。吾村專以紡織爲業。近聞已無紗可紡。松太布市。消滅大半。去年棉花客。大都折本。則木棉亦不可恃。

と言ったのは、道光二十六年(一八四八年)五月のことであった。

棉價は、六二・六三の兩年、南北戰爭による國際的棉花不足を敏感に反映して、異常に高くなっているが、翌年には既に鎮靜する。兩年を除いても、七〇年代以降、原棉が引き續き値を下げることは否めない。

『顯志堂集』卷一二 袁胥臺父子家跋

乾嘉之間。漕幣頗紆。非由銀之稍減。實由米之過貴。大抵二兩以上。今米價一兩四五錢。視近年驟賤。農亦驟困。至於百物。則無宜賤者。而今則百物之貴。皆視國初十倍上下。

『松江府續志』卷五 疆域志 風俗

咸豐庚申以後。亂離甫定。凡服用之物。及一切工作。其價值莫不視從前加長。比年以來。惟粟及棉價較平。其他不能稱。是故歷年農田。雖尙稱豐年。而農日以病。

また『申報』光緒九年一月三日 物貴民憂は、大豆などの諸物價上昇の中で、米だけが安いとする。

光緒『重修嘉善縣志』卷八 風俗

乾嘉時。農民力耕而畏法。咸同之後。惰耕而玩法。附近城鎮之農。習慣抗租。長工傭錢。倍於昔時。

『中國近代農業史資料』第一輯 一二三頁〜一二四頁

『江蘇省寶山縣。乾隆五十四年』蔡招在黃位中家。暫做短工。每月工錢三百文。并未立契。亦無主僕名分。

〔江蘇省山陽縣。嘉慶四年〕伍方遠雇在徐珍家。暫做田

工。毎月工錢五百文。并無主僕名分。

97 『清俗紀聞』卷之二 居家

在郷者月奉公人一人一ヶ月の給料同〔錢〕三百文程。

在郷とは農村を指す用語であり、在郷者月奉公人とは、中國流に言うところの月工である。

98 光緒『烏程縣志』卷二六 水利 會議澁港歲修章程十條

查。澁上居民。自經兵燹。人煙稀少。郷農自相雇力。一日尙須二百八十文。

同様な資料と、その対象地域、勞賃水準を列挙する。

A Report from Rev. J. F. Johnson, American Presbyterian Mission, Hangchow, Chékang, in "Tenure of Land in China and the Condition of the Rural Population," *Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society*, Shanghai, New Series, vol. XXIII, For the Year 1888, p. 106. ……一二〇～一六〇文

『申報』光緒一〇年閏五月一八日……浙江嘉興府 二二〇～二

二〇文

『宜興稟牘』 稟武進沙洲被災查勘爲理情形 (『中國近代農業史資料』第一輯 六八七頁) ……江蘇武進縣 一〇〇文・二〇〇文。

99 日工の勞賃を三〇倍して月工の勞賃とはならぬ。兩者の比率

については、王立アジア協會の調査が、日工の勞賃を一二〇～一六〇文、月工の勞賃を二四〇〇～三〇〇〇文としているのが参考になる。

100 『顯志堂集』卷一二 袁胥臺父子家書跋

道光初年。每工八十四文(今匠工二百二十文)。

101 さしあたり『中國近代農業史資料』第一輯 一五一頁以下を参照。また註98参照。

102 光緒『松江府續志』卷五 疆域志 風俗

舊時傭人耕種。其費尙輕。今則傭值已加。食物騰貴。一畝已約需工食二千錢。再加膏壅二千錢。在農人自種或伴工。牽算或少減。

Obviously, this tendency ran counter to the plans of a government which intended to embrace all the nation in its rule. The five cases of impeachment in the Hung-wu period represent a thorough-going reaction to the southern officials and landlords, and the plans at the end of the reign for moving the capital to Sian 西安 also were made with a view to unification. However, these plans were not carried out and in the Chien-wen reign, with the capital remaining in Nanking, a pro-Southern stance was adopted. This had been necessitated by the great power of the princes in the north, which led the Chien-wen regime to consolidate its own power base.

Under the influence of southern officials, the Chien-wen regime laid plans to dispossess the northern princes. The anti-southern policies of the Hung-wu period were completely reversed.

Thus the Yung-lo emperor opposed the Chien-wen emperor's plans for disenfeoffment and caused the "disturbances of Ching-nan." The removal of the capital to Peking after he became Emperor is certainly not because this was his old domain. As a rescript issued upon his accession makes clear, he proposed to continue and carry out the policies of the Hung-wu period.

The early Ming dynasty, as a whole, despite variations of direction, represent a movement away from a government dominated by southerners, and towards a unified state.

Commercial Farming and the Use of Soybean-meal Fertilizer in the Ch'ing Dynasty

Adachi Keiji

At the end of the Ming and beginning of the Ch'ing, a class of rich farmers developed, as may be seen in *Mr. Shen's Book of Agriculture* 沈氏農書. Cultivating a comparatively large area with the aid of hired labour, they formed a class called "upper peasants" 上農 or "rich farmers"

富農 and aimed at production for sale. One of the conditions for the development of this class was the introduction of labour-saving methods of fertilization, which was the basis of cultivation. This need was met by such commercial fertilizer as soybean-meal fertilizer.

The use of soybean-meal as fertilizer began in the middle of the Ming dynasty, but only on a regional basis. Its use became widespread during the early Ch'ing, and by the Ch'ien-lung 乾隆 and Chia-ch'ing 嘉慶 periods, apart from the Northeast, Shantung, North Honan, and North Kiangsu, it was also shipped by sea and river transport to the lower Yangtze in large quantities. It held a position of first importance in Ch'ing commerce, and even including illegal smuggling remained one of the most important products of the period. Quantities traded were sufficient to supply all the needs of the lower Yangtze area. That this area was able to purchase fertilizer is proof of the high level small scale commercial farming had reached.

However, in the later years of the dynasty, although soybean-meal was shipped to sugar-cane farmers in Kuangtung and Fukien, it became scarce in the Shanghai area. Also, the amount transported by river into Honan, Southern Anhui, and Northern Kiangsu was greatly reduced. Thereafter, the introduction of foreign products and the likin system changed the conditions of commerce in fertilizer. The drop in prices and rise in wages resulting from imported cloth formed the background for the decline of commercial farming in the lower Yangtze area.

Problems of the Status of Tenants 佃戶 in the Sung

Takahashi Yoshiro

This article is an investigation of several problems connected with the legal and social status of tenants during the Sung dynasty.

I. The legal position of landlords, with respect to tenants, became increasingly strong under the Northern and Southern Sung and the Yuan,